

3.11 東日本大震災からの復興―東北学院大学図書館の経験

1. 東北学院大学図書館の概要

東北学院大学は、文学部、経済学部、経営学部、法学部、工学部、教養学部と、文学研究科、経済学研究科、経営学研究科、法学研究科、工学研究科、人間情報学研究科、法務研究科からなる、仙台市と多賀城市に3キャンパスをもつキリスト教系総合大学である。そして、12,000名の学部学生、210名の大学院生、312名の教員、197名の職員を擁している。

本学図書館は、1891年（明治24年）に創設され、土樋キャンパス（仙台市青葉区）に中央図書館（1985年竣工）と分室（1985年改修）、泉キャンパス（仙台市泉区）に泉キャンパス図書館（1988年竣工）、多賀城キャンパス（多賀城市）に多賀城キャンパス図書館（1982年竣工）を配した3館1分室体制をとっている。その概要は以下のとおりである。中央図書館は、閉・開架書庫（収容能力1,000,000冊 含分室）、閲覧室（800席 含分室）、学習室、事務室を備え、730,000冊（含分室）の図書、9,500タイトルの雑誌を所蔵している。年間入館者数は123,000名（含分室）で、スタッフは専任職員8名、委託職員24名（含分室）である。泉キャンパス図書館は、閉・開架書庫（収容能力480,000冊）、閲覧室（500席）、学習室、事務室を備え、300,000冊の図書、3,500タイトルの雑誌を所蔵している。年間入館者数は178,000名で、スタッフは専任職員3名、委託職員10名（含分室）である。多賀城キャンパス図書館は、開架書庫（収容能力150,000冊）、閲覧室（320席）、学習室、事務室を備え、150,000冊の図書、3,000タイトルの雑誌を所蔵している。年間入館者数は38,000名で、スタッフは専任職員2名、委託職員6名（含分室）である。

本学は、1978年に宮城県沖地震を経験しており、将来予想される第二の宮城県沖地震に備えて、建物

の耐震化工事や、緊急時の防災備品の備蓄などに務めてきた。図書館においても、書架と建物壁面・天井を結合することによる書架の転倒防止、書架への図書落下防止バーの設置など独自に地震対策をすすめていた。こうしたなかで今回の東日本大震災を迎えることになった。以下にその経験と復興の取り組みについて報告する。

2. 3.11大震災と4.7余震による被害状況

1) 大学全体の被災状況の概要と対応

2011年3月11日14時46分、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の東日本大震災を、図書館長は同時刻開催中の全学教授会の場で経験することになった。耐震工事が施された建物5階にいたが、建物の老朽化もあり、その揺れは経験をしたことの無い強さであった。会議は即座に中断され、揺れが収まったのち直ちに安全な場所への移動となった。当初は何が起きているか全体の状況も把握できず学生、教職員の安全を確保することが急務であった。その後、帰宅困難となった教職員・学生を対象に体育館が開放され、避難場所の提供とその運営が始まった。

時間がたつに連れ本学の被った震災の被害はその規模、内容とも深刻なものであることが明らかになってきた。土樋キャンパスの礼拝堂の天井崩落、押川ホールの天井崩落、煙突ひび割れ（道路の自主的な通行制限を実施）、いたるところに見られる建物の壁ひび割れ、泉キャンパスの体育館梁の損傷、地盤沈下、屋上高架水槽破損、多数の壁面損傷など広範囲におよんだ。また、沿岸部にあった東北学院閣上シーサイドハウス（含む漕艇部艇庫）は全壊してしまったことも確認された。こうしたなか、予定されていた卒業式、入学式をはじめほとんどの行事予定を中止し、また、学内への学生の立ち入りさえ制限（5月8日まで）せざるを得なくなった。

この大震災に立ち向かうため3月11日に東北学院災害対策本部を設置し、学生・院生、教職員の安否確認と被害状況の把握、救援物資の確保と配送

を開始した。その後、状況の把握が進む中、14 日からは ホームページを利用した情報発信を再開し、震災への大学の対応を発信した。また、建物の安全確認などを進めつつ、復興計画の作成と実施に向かうことになった。全学的な努力もあり、5 月 9 日には制限つきながら前期授業を開始することが出来た。

2) 3.11 大震災と図書館

震災発生時 入館者は中央図書館 20 名、泉キャンパス図書館 0 名、多賀城キャンパスと図書館 5 名で、職員は通常業務についていた。館内放送にて、書架から離れ身の安全を確保するよう注意連絡を行うと共に、最大の揺れが過ぎた時点で職員による館内見回り、利用者の安全確保と避難誘導を行うことにより、利用者、スタッフ共々怪我人は発生しなかった。その後、臨時の休館措置をとり、スタッフは解散した。専任職員は避難所の設営など他部署への応援に向かった。

頻発する余震の中、被害状況を正確に把握することは困難であり、建物の安全確認を先行させつつ図書の落下状況、書架など破損状況を調査することになり全体像が判明したのは地震発生後 2 ヶ月以上たってからであった。そのため復旧作業も長期に亘ることとなった。現在、判明している被害状況の概要は以下のとおりである。

中央図書館：落下図書資料 390,000 冊 (60%)、スチール書架の傾斜 (台 %)・固定ボルト破断、壁面タイルの亀裂・崩落、壁面亀裂、パソコン転倒 (利用者用 5 台、事務用 1 台)

分室：落下図書資料 40,000 冊 (60%)、スチール書架の傾斜 (台 %)・固定ボルト破断、壁面タイルの亀裂・崩落、壁面亀裂

泉キャンパス図書館：落下図書資料 190,000 冊 (70%)、木製書架の傾斜 (台 %)、壁面タイルの亀裂・崩落、壁面亀裂、パソコン転倒 (利用者用 3 台)、
保存書架 (地下) の傾斜

多賀城キャンパス図書館：落下図書資料

1,500 冊 (1%)、書架の傾斜 (台 %)・、壁面の亀裂、保存書架の一部傾斜

事務室：書類等の落下

3) 4.7 余震と図書館

各図書館の復旧作業の最中、4 月 7 日 23 時 32 分ごろマグニチュード 7.2、震度 6 強の最大級の余震が発生した。その結果、書架戻し作業中の図書資料、未整理分図書資料などの多数の落下、書架の変形、破損の進行などが発生し、作業のやり直しが迫られた。しかし、事務室などの被害は軽微なものにとどまった。

3. 復興への道のり (全学の取り組みの中で)

地盤沈下を含む多大な被害を受けた泉キャンパス、建物被害が多数発生した土樋キャンパス、震災の被害は他キャンパスに比べ少なかったが避難所として働くことになった多賀城キャンパスとそれぞれの震災後の状況は大きく異なっていた。こうしたことは図書館の復旧・復興にも大きな影響を与えた。以下に図書館の復旧の道のりをまとめておく。

災害対策本部が土樋キャンパスに設置 (3 月 12 日) され東北学院全体の状況把握と当面の復旧計画の検討・実行を担うことになった。図書館も、3 月 14 日には、出勤可能な職員を中心に打ち合わせ会を土樋キャンパスで開催し休館の掲示など当面の対応をとることにした。打ち合わせ会はその後断続的に開かれたが、建物の安全確認も済んでおらず職員は通勤可能なキャンパスへの出勤、学生の安否確認など他部署への補助業務に入ることになった。このような状況は建物の応急安全確認・応急耐震診断が終了した 3 月 24 日まで続くことになった。

図書館内部への立ち入りが可能となった 24 日以降本格的な被害状況調査、復旧作業が開始された。具体的には事務室復旧が優先され以後の作業拠点が確保された。図書館サーバーも幸運にも直接的被害も無く再起動でき、図書館情報を学外に発信することが 28 日には可能となった。復旧作業を本格

化させる中、貸し出し中の図書の取り扱いをはじめとした利用者への対応、ILLなどの他大学への対応、年度末業務など緊急を要する業務を遂行した。更に、使用可能と思われる書架への図書資料戻しも開始した。

3月31日には3館連絡会議を開催し、3キャンパスの現状の確認とその後の復旧計画について検討し、災害対策本部の承認の下図書館計画を確定した。この計画に基き業者による書架等のチェックと見積もり作成など施設面での復旧を開始した。一方、中央図書館学習室を法務研究科院生に、多賀城キャンパス図書館学習室を工学部基礎教育センターに臨時的に提供するなど被災した部局に対する支援活動も行った。図書館復旧を進めるには通常の勤務体制では不十分と判断し各館の状況に応じ各館相互の職員勤務先の一時的移動も実施した。これは委託職員も含めての措置であった。復旧に効果を上げた職員の力の集中は、図書館の施設復旧が完了するまで随時実施された。

4月に入り書架の本格的修理のため設置業者による点検を実施したが、その結果は予想をはるかに超える深刻な状況であった。中央図書館では、閉架書庫の書架の3割の組み直し、分室の書架全般的修理、泉キャンパス図書館では、開架書庫の木製書架すべての組み直し、地下移動書架のゆがみ修理などであった。このため復旧計画も、落下図書資料の書架への戻し作業から、書架修理準備のための作業へと変更が必要となった。使用可能な書架への戻し作業は続行しつつも、書架修理のため書架に残された図書、いったん戻した図書をすべて要修理書架より他の場所へ移動することが必要となり復旧作業の長期化を余儀なくされた。

4月6日には、大学ホームページに5月9日授業開始のメッセージが掲載され、すべての復旧業務が、この授業開始日を目指し取り組まれ、図書館も同様となった。こうした中、4月7日の最大級の余震を迎えたが、幸いにも授業再開の予定を変更するには至らず全力を挙げた作業を継続することが出

来た。

図書館の復旧作業が新しい局面を迎えたことにより、職員の力の集中だけでは、授業再開までにその作業を間に合わせる事が困難であることは明らかであった。そこで、学内に組織されたボランティア・ステーションに対し、学生ボランティアの派遣を依頼し協力を得ることになった。4月4日より7日まで、5名/日の学生ボランティアが泉キャンパス図書館の2階開架書架図書の仮置き場への移動作業を行ってくれた。泉キャンパスそのものが大きな被害を被っていたことから、職員によるボランティア学生の安全確保には十分な注意を払った中での作業であった。また、12日からは、紀伊国屋書店・日本アスペクトコアよりサポート・スタッフの派遣をうけ、作業の迅速化が図られた。

4月19日に館長・分館長会議を開催し、図書館の再開について協議し次のような方針を決定し、職員・委託職員との打ち合わせをへて、4月22日図書館ホームページを通じて学内外に告知した。図書館再開は、開館時間を短縮したうえ、館内閲覧（開架書庫に限定）に限る形で実施された。館外貸し出し、ILL、利用者説明会などは復旧の進捗状況にあわせ再開する措置が取られた。また、復旧佐合は継続されており、職員の勤務体制もそれに応じたものとなっており、建物の修復作業や、閉架書架の修理などは再開後も進められた。

5月9日の授業開始後、利用者サービスを再開したがその要望に応えるには程遠い上京が続いた。館外貸し出し、ILLなどは6月初旬には対応可能となったが、書架の修復作業が中央図書館で6月23日まで、分室、泉図書館（地下書庫）では7月初旬までかかり、閉架書庫内の図書資料利用再開に多大な障害となった。図書館としては、夏休み前には基本的な復旧を完了させたいと考えていたとき、saveMLAKより図書館復旧への支援の申し出があり、直ちに災害対策本部の承認を受け支援をお願いした。泉キャンパス図書館で力を発揮した学生ボランティアは図書業務については知識を持っておらず、

図書資料の書架への戻し作業などを依頼するには無理があった。一方、図書館サービスを通常の状態に戻すためには、専門的知識を持ったボランティアの存在は欠かせないものであった。こうして点からも、saveMLAK の申し出は非常に時宜にかなったものであった。また、紀伊国屋書店・日本アスペクトコアよりサポートスタッフの派遣も継続されており復旧を速めるものとなった。

5月の図書館再開後も、図書館職員、ボランティアの力により、分室を含め夏休み前には通常のサービスを提供できるようになった。そして、7月27日には、国立国会図書館職員3名を講師に迎え、「東日本大震災により被災した図書館資料の補修・保存の手法を学ぶ」をテーマに研修会を近隣の大学図書館にも呼びかけ開催することが出来た。しかし、復旧に要した期間、損害額は以下のとおりであり、その大きさは大変なものであった。主なものとして、書架修理に一ヶ月、復旧作業全体に四ヶ月余を要し、書架修理、図書の落下等に伴う災害復旧作業費などに38,800,000円余の損害であった。台湾の出版社からの支援などもあったが大きな損害であったことは確かであった。

4. ボランティア支援の受け入れとその成果・教訓

図書館はその業務の性格から多くの職員を必要とすることは周知のとおりである。しかし、最近の図書館を巡る状況はこれとは逆に人員を削減する方向で進んでいる。本学図書館においても同様である。こうした状況の下、大震災から一日も早い復旧を成し遂げるためには、財政的な措置と共に、人手を以下に確保するかが重要となる。これは今回の震災の教訓の一つであった。実際には3種類のボランティアを受け入れることになった。それらは業務内容の違いはあったが、いずれも貴重な役割を果たしていただき深く感謝するものである。それぞれの特徴・成果などは以下のとおりである。

1) 学生ボランティア

学内ボランティア・ステーションより派遣された学生ボランティア

業務内容：泉キャンパス図書館で、木製書架の組み直し修理の準備のため図書の書架から仮置き場への移動業務―図書に関する特別な知識を必要としない単純作業

期間：4月4日～7日 延べ20人

留意点：図書館を一日も早く復旧させるための業務であることと作業時期が震災後間もないことから学生の安全確保を第一とすることを確認した。作業環境が一般学生の入構禁止区域内の建物であったため、参加者の入出管理、安全確認を徹底した。また作業の円滑化のため図書館職員が直接作業内容を現場で指示することにした。

成果：木製書架修理の早急な修理には書架内の図書資料をいかに速く移動できるかが重要であり、この点で期待通りの成果を上げることができた。また、特別な知識は必要としないが苦勞の多い単純作業であることに対する学生諸君の協力は高く評価すべきである。

2) 業者ボランティア

紀伊国屋書店、日本アスペクト（人材派遣会社）より派遣されたサポート・スタッフ

業務内容：委託職員の業務支援（図書の再配架など）

期間：4月12日～、

留意点・成果：委託先であることを考慮しつつも、図書館の現状と復旧の課題、問題点などを率直に述べ協力を要請した。特に勤務体制変更への理解と協力、そのことを補完する形での支援は復興の大きな力となった。

3) saveMLAK ボランティア

saveMLAK より派遣された図書館職員ボランティア

業務内容：中央図書館書架修理のため他フロアに搬出していた図書資料の搬送と配架

期間：6月27日～7月1日 5～6名／日 延べ14名

留意点・成果：専門業者による書架修理が終了することに伴い移動していた図書資料を再配架する必要が生じてきた。一方、部分的な再開とはいえ図書館サービスのための人員配置は欠かせないものとなっていた。更に、夏休みを目前にし、学生・院生などのレポート・論文作成のための環境を早急に整えることが求められていた。配架作業は単純作業とは言えず図書館業務についての専門性が求められるものである。こうした状況の中で課題に取り組むひつようがあった。saveMLAK の支援はこれらに合致するもので、これ以上の支援は無いと思われる。

以上述べてきた3つのボランティア支援受け入れは図書館としては初めての経験であり十分な対応が出来たかどうか反省すべき点もある。しかし、これらのボランティアに支えられることにより期待された速度で復旧を成し遂げることが出来たと考える。学生を中心としたボランティア組織、図書館職員を中心としたボランティア組織などは一時的なものと考えず、継続的な組織として発展し今回のような困難な時期にその力が発揮されることが強く求められていると考える。

5. おわりに

未曾有の被害をもたらした大震災発生より既に9ヶ月がすぎた。図書資料を中心に学術情報を正確かつ迅速に利用者に届けることに多くの時間をささげてきた図書館が、震災によりその基本的業務を何らなしえない状態に置かれた。図書館職員を先頭に学内外の力を集めこの難局を乗り越えことが出来たことは喜びに耐えない。また、懸案であった図書館の地域市民への開放を9月より開始し、新しい一歩を踏み出すことになった。大学図書館はこの大震災の中で何をすべきか、また、出来たのかを考えることが今後の図書館運営にとって大切なこととおもう。この報告がそのようなことに少しでも役立つことを願う。

最後に、本学図書館の佐藤恵氏をはじめ、本報告の作成に協力いただいた職員各位に感謝をささげるものである。